「K・Y」って、どっちだ？

「検察は三権分立（司法、立法、行政）のどこに入ると思うかね？」

戦後最大の政界スキャンダルとなったロッキード事件で、田中角栄元首相（一九一八―一九九三）とともに東京地検特捜部に逮捕された北海道（旧衆院三区）選出の佐藤孝行・衆院議員（一九二八―、二〇〇〇年引退）は後年、若い記者たちに厳しい顔で問うのが常だったという。函館港に近い地元の個人事務所で佐藤氏にインタビューした知人も同じ質問を受けた。この時、記者が「検察は司法です」などとうっかり間違えようものなら、彼はたちまち不機嫌になった。「検察は行政の一機関に過ぎない。そんなことも知らずに新聞記者が勤まるのか？」と。政治的挫折を味わった佐藤氏は検察とマスコミに対する強い不信感を隠さなかった。

ロッキード事件は、全日空の新機種選定にからみアメリカの航空機メーカー・ロッキード社が大型旅客機トライスターの売り込みを図って、政権中枢にワイロを配ったとされる疑惑。東京地検特捜部が一九七六（昭和五十一）年七月二十七日、田中元首相を受託収賄と外為法違反容疑で逮捕して本格捜査の幕が上がった。ロ社の代理人として政界への贈賄工作を企てた総合商社「丸紅」が一九七二年、トライスター導入に便宜を図ってもらう意図で田中首相（当時）に数回に渡って計五億円のワイロを贈ったという構図。当時の運輸大臣の橋本登美三郎氏、運輸政務次官だった佐藤孝行氏もワイロを受け取り、機種選定について職務権限を行使した「黒い高官」とされた。

総理の犯罪を明るみに出した東京地検特捜部は喝采をあびた。しかし、「構造汚職」（という言葉があった）のすべてを特捜部が暴いたわけではない。例えば、ロ社が防衛庁（当時）に対して行った新鋭の対潜哨戒機「P３C」の売り込み工作について特捜部はなぜか踏み込まなかった。ロッキード事件の端緒となったアメリカ上院の外交委員会・多国籍企業小委委員会ではクライスター旅客機とともに「P３C」の売り込みに関する対日工作、大物フィクサーへの成功報酬の密約も報告されていた。日本政府は当初、航空機産業育成のため次期哨戒機の国産化方針を打ち出したが、一九七二年秋（つまり田中内閣の発足直後）に国産化は白紙に戻り「P３C」導入が決まった経過もあったのだが…。

「地検が防衛をめぐる利権に踏み込めば、日米安保体制が揺らぐ。保守政権そのものが危うくなる」。そんな解説も当時はあった。政界の深い闇を暴いた末に保守政権が覆っては元も子もない。検察は政界の行き過ぎにお灸をすえることがあっても、体制に大火傷を負わせて崩壊を招くことは結果的に避けるという指摘だ。

政治資金規正法違反を切り口に東京地検特捜部が永田町に分け入ったスキャンダルには「佐川急便事件」がある。政界のタニマチと呼ばれた東京佐川急便の渡辺広康社長が膨大なヤミ献金を繰り返していたとして特捜部は一九九二年、特別背任容疑で強制捜査に着手した。金丸信・自民党副総裁への五億円の献金が飛びぬけていた。金丸氏は同年九月、政治資金規正法違反を認める上申書を特捜部に提出して衆院議員を辞職した。特捜部は金丸氏本人の聴取を行わないまま略式起訴。金丸氏が東京簡裁に罰金二十万円を納めて法的には幕引きとなった。しかし、そこから先は世論が沸騰した。「五億円のヤミ献金に対するペナルティーがたったの二十万円？」。生活者の率直な驚きは特捜部に対する弱腰批判になった。世論に押される形で特捜部は翌九三年春、ヤミ献金を隠したとして金丸氏を所得税法違反（脱税）容疑で逮捕、関係したゼネコン十数社を捜索した。これが検察にとって「宝の山」になった。大手ゼネコンから押収した記録（フロッピー）を元に特捜部は仙台市長や茨城、宮城県知事らを摘発した。

民主党の小沢一郎代表の公設第一秘書が政治資金規正法違反で逮捕、起訴された事件でこれらの古い記憶が改めてよみがえった。「徹底抗戦」を訴える小沢氏と市民感情のズレは大きい。かつて、自民党にあった小沢氏は田中首相の秘蔵っ子として育ち、金丸副総理の後押しで幹事長も勤めた。小沢氏をめぐる今度の事件で少なくない人々が、田中―金丸―小沢と連なる政治的遺伝子を感じ取っているのではないか。「K・Y（漢字・読めない）」首相も困ったものだが、野党第一党の「K・Y（空気・読めない）」代表にも困惑が広がる。（圭）